# 候補生たち

杉林機構

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
候補生たち

【Ｎコード】
Ｎ９３０５Ｙ

【作者名】
杉林機構

【あらすじ】
魔界、魔力、そして魔法。隠されていた秘密を暴き、地上を魔界にしようとする襲撃の夏から半年。聖木乃女子学院にはそれぞれの思惑を抱えた守護者候補生たちが集まっていた。府本里美、昴星河の二名もまた。果たしてライバルを蹴散らし、守護者の椅子を勝ち取るのはだれなのか。

## #1　わたしが、良い子じゃないって。

神社自体にはなんの興味もなくて。
だから名前も知らないし、なんの神様かも知らないし、ちゃんとお参りしたこともない。
けれど、たぶん気にはなっていて。
うまく説明できないけど、古い大きな木がたくさんあって、いつもうす暗くて、いつも人の気配がなくて、いつもひんやりしていて、なんかとくべつな場所って感じがしてた。友だちとケンカしたとき、親に叱られたくないとき、色々悩んだり落ち込んだりしたとき――つまり、ひとりになりたいとき、つい行ってしまう場所だった。
お賽銭箱の裏側に座って、向こう側にはきっと神様がいるはずの扉にかかった重たそうな錠前をぼんやり見つめていると、ふしぎと力が湧いてくるような、そんな気がして。
わたしの場所っていうか、パワースポット？　みたいな。
でも、あの日はちょっと違っていて。
友だちとプールに行く約束があって家を出たのに、気づいたら神社にいた。セミの鳴き声に囲まれて、じっとりと汗をかいて、下に着ていた水着が変に張り付いていて、暑いのになんだか寒いような、いつもとちがって気持ち悪い感じ。
「あー、あー、あーぁー……」
わたしはバカみたいに口をあけて、声を出していた。
そうしていないと息苦しかったから。
遅れるからメールしようとか、はやく泳いでさっぱりしようとか、そろそろ宿題を片付けようとか、帰りにアイス食べようとか、色んなこととか、からまりながら頭の中をぐるぐる洗濯機みたいに回っていて、けど、なにひとつ考えてもなくて、どこかおかしかった。
そして足は勝手に動いていた。
「……あー、あーぁー、あー、あー、あーぁー」

神様の集金箱をいつものように無視して、その奥の扉にかけられた錠前に触れる。なんとなく、けれど、たしかに開く予感があった。実際、鍵もなにもなくカチリと動いて、血みたいな鉄の匂いが鼻を刺す。中に入ろうなんて思ったこと、一度だってなかったのに。わたしはガチャガチャ外した錠を投げ捨て、力いっぱい扉を開いていた。

冷たくて、かび臭い空気があふれ出て。

「こんにちは」

不意に、背後から声をかけられて。

「ぁっ」

わたしは吐き出しかけていた声と一緒に息を飲み込んだ。

悪いこと、してる。そう思ったら背中からどっと汗が出てきて、それがすぐに冷えて、身体がひやっと震えて、動けなかった。一度、本屋さんで万引きした中学生が呼び止められるのを見たことあって、逃げられそうなのに、逃げられなくなっちゃう。こんな感じなんだ。

捕まるんだ。

「聞こえなかった？　こんにちは」

「……」

どっくとっく。

息苦しくなるような、脈打つ血管の音を耳の奥に感じながら、両親のこと、考えてた。一人娘が捕まったら、どう思うだろうって。けど、あんまり深刻な気持ちにならなかった。逆に、あの仲良しで、優しい二人が、どんな風になってしまうかって、ワクワクする。『あんたなんかウチの子じゃない！』とか言われちゃうとかって。こんな日がいつかくるって思ってたのかもしれない。なんか変だけど、わかってた。

わたしが、良い子じゃないって。

どっくとっく。

「どうしたの？　ねぇ？」

足音がどんどん近付いてくる。

唾を飲み込んで、わたし、笑いそうになってた。誕生日プレゼントを貰って、嬉しいけど、なんか笑うと感じ悪いかな、とか思っちゃうような、外からどう見えているのか気になっちゃって、くちびるがピクピクするときの、あの気分。わたしの中に、隠したい自分がいることをすごく意識する。良い子のフリをしたがってるって。

ほんとうは、良い子じゃないから。

「あなた、府本（ふもと）さんちの里美（さとみ）ちゃんでしょう？」

「……」

振り向かないで、うなずく。

どくとくどくとくどくとくどくとく……。

名前を呼ばれて、わたしの鼓動はリズミカルになる。

悪いことしようと思ったことないけど、良いことしようと思ったこともない。

なんて、この言い方はきっとフェアじゃなくて。

悪いことは思いつくけど、良いことは思いついたこと、ない。

「里美ちゃん？」

ポン、と肩を叩かれて。

そこまで。

わたしがあの日について覚えていることは。

目が覚めたら翌日で。

家の、わたしの部屋の、布団の上で。

変な夢、と当たり前のように納得したのだけど、パジャマのまま居間の襖を開けると、普段はかかっていないエアコンが動いていて、冷たい空気が流れ出てくる。両親と担任の吉田先生と見知らぬ女の人、男女二人ずつ、八つの真剣な目が一斉にわたしを見た。それですぐ夢じゃないとわかった。夏休みの午前六時、ラジオ体操がはじまる時間だった。そんな時間に大人が集まっていることなんて、ふつうに変な夢みたいだったけど。

「里美、着替えて顔を洗ってきなさい」

お父さんが、これまであまり聞いたことのない落ち着いたトーンで言った。
横でお母さんがうなずいて、わたしもうなずいて。
「ぷはっ」
生ぬるい水で顔を洗ったら、それほど悪いことしたっけ？　と冷静になる。たしかに、神社の社殿に勝手に入るのは悪いことだろうけど、学校の先生を呼ぶほどのこと？　鍵だって最初から壊れていたのでは？　中にも入ってないし？　居間にいた女の人が神社の人？
次から次へと疑問が湧いてきて、まとまらなくて。
「どうでもいいや」
すぐに考えるのをやめた。
あの一瞬にワクワクしたような感情はもうどこにもなくて、これから面白くもなんともなさそうな現実的お説教が待ってるだけと思ったら、なにもかもバカバカしい。わたし、どうかしてた。夏休みのなにかで浮かれて。くっだらない。
部屋に戻ってケータイを見ると、約束をすっぽかしたらしいことだけ現実。
心配するメールから、だんだん怒っているらしいメールへ。
フォロー、大変だ。けど、ともかく先生を待たせていた。言い訳は後で考えよう。さくっとマジメに叱られればお説教もそんなに長時間にはならないはずだ。こんなに朝早くから来ているのだし、先生も女の人も、そもそも両親だって今日の予定がある。
「お待たせしました」
できるだけよそ行きの声で、わたしはわざとらしく反省しながら居間に戻る。
廊下で正座をして襖を開ける。テレビで見た旅館の仲居さんがそうするようにおしとやかにそして深々と頭を下げて、バカみたいだけど、子供なりに真剣にやってるんだなと先生たちが思ってくれれば、笑われてもオッケー。そんな、きったない計算で。
「その、昨日は、申し訳ありませんでした――」

そう言ってゆっくりと頭を上げると、
「――あ、れ？」
四人の大人たちは不思議そうな顔でわたしを見ていた。
「なにを謝っているんだ？　里美」
「……えー、っと、昨日のこと、じゃないの？」
「それなら、謝るんじゃなくて、お礼だろう。昨日、神社で倒れていた里美を家に連れてきてくださったんだ。吉田先生と、こちらの方が」
と言いながら、お父さんは繰り返すように頭を下げる。
「僕は気付かなくて、通りすがりに見つけたのは平島さんですから」
担任の先生は慌てて謙遜し、
「そんな、私も偶然ですよ、昔から寺社仏閣に興味があるだけで、ついふらっと覗いただけで、そんなお礼を言われるようなことではありません。里美さんが無事でなによりです」
ひらしまさんと呼ばれた女の人が上品に笑う。
両親や先生よりは若いだろうか、でも、なんだか高そうなスーツを着ている。シャツの生地もやたらなめらかだ。顔とか身体つきはそれほど印象に残る感じじゃないけど、身なりがきちんとしているので賢そうに見える。けれど、なにより、その声は神社でわたしに声をかけたものと同一であるように感じられた。それは間違いなくて。
どっくとっく。
また鼓動が大きくなった。
「いーえー、軽い熱中症ですから、里美、ほらきちんとお礼をしなさい」
いつのまにかわたしの横に移動してきていたお母さんが、そう言ってわたしに頭を下げさせる。「ありがとうございました」と言わされながら、わたしはしっくりこない。どうして、神社のこと、言わないのか。勝手に鍵を外したことを。
大人がなにかを隠すときは、必ずそうする理由があるから。

「夏、外を出歩く時は帽子ぐらいかぶらないとね？」
「……はい」
わたしは疑ってかかる。
「では、里美さんも来たので、説明をもう一度」
ひらしまさんは食卓の上に広げられていた紙をとんとんと揃えた。
「ほら、里美、座りなさい」
「うん」
お母さんに促されて座布団の上に正座して。
「これ、見てくれる？」
「はい」
ひらしまさんはわたしの前に一冊のパンフレットを置いた。表紙には大きな桜の木と、学校の校舎らしき写真。そしてなんだかオシャレな制服を着た女の子が、ありがちな嘘くさい笑みを浮かべている。この学校に入れて幸せ、みたいな感じ。
「せいき、の、じょしがくいん……」
わたしは印刷されている文字を口にする。
「いいえ、里美さん。聖木乃（ひじり・きの）女子学院中等部」
「はあ、そうですか……」
そう言われれば、東京に行く途中に木乃という街がある、ことは知っていて。
「来年から、この学校に通いませんか？」
「え？」
だから？　と聞くよりはやく、見透かされるように言われた。
「わたしが？」
そう呟いて、わたしは両親や先生の顔を見る。お父さんはなにやら難しい顔をしていて、それはお母さんも近いようで、でも先生は強くうなずいていて。
「そう、府本里美さん、あなたに、是非とも」
そして、ひらしまさんはなんだか凄みのある笑顔でわたしを見ていて。

なにかに巻き込まれてる。
整理できないわたしの頭にも、それは強く感じられた。

## #1　わたしが、良い子じゃないって。（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

## #2　わたしとしても、やめるつもりだったけど？

ひらしまさんは、平島志穂（しほ）、という名前で。
体操部コーチで、大学時代には跳馬でインカレ三位にもなったことがあるそうで。
言われて見れば、正座する脚の筋肉は見知った感じで。
「スカウト？」
話は飲み込める。つまり、物心つく前から、選手だった両親に連れられるまま体操競技の道を進んで、地区の大会ではそこそこの成績を残している。そんなわたしを学費免除の特待生として迎えたい、そういうことだった。
「ええ。どうかしら？」
平島さんは競技をやっていた人らしいきちんとした笑顔で言った。
「いい話、ですね」
良すぎる、わたしはそう思う。
生まれてから十二年、そのほとんどを捧げてなお、わたしの体操は技能的にもセンス的にも突出したところはなくて。地道な練習で地味に整った、良く言えばそつのない、悪く言えば面白味のない、将来性に乏しい、大成しない、そんなものだから。ふつうにスカウトなどありえなくて。そのことはわたし自身もよくわかっているから、別にいいのだけど。
話を聞くわたしを見ている両親の表情がさえない。
全日本にも出たことがあって、わたしに才能がないことは他のだれより、きっとわたし自身よりわかっていて、それでもいつか化けるんじゃないかと期待しちゃってるお父さんも、オリンピック候補とまで言われた時代もあって怪我で挫折した夢を託してくれちゃってるお母さんも、あからさまに浮かない顔をして、だまってる。
そろそろ、あきらめどき、だから？
そうかも。両親とも小さいから、わたしの身長もそこまで伸びな

いだろうけど、成長期の身体に負担をかけて体操をつづけるのは大変なことだから。選手としての展望があるならともかく、スポーツとして楽しんでつづけるならともかく、無理してまでって。

「……なんか」

そんな想像したらムカついてきてた。

わたしとしても、やめるつもりだったけど？

でもさ。ひとり娘に期待する両親の気持ちをおもんぱかって？

ぱかって脚を広げたり、ぱかって回ったり、ぱかって跳んだり、ぱかって平均台の上で逆立ちしたり、ぱかってレオタード着たり、ぱかってぱかってぱかぱかしいと思う心を押し殺してやってきたよ、わたし。

なのに。

才能ないからよそう、なんて。

そんな言われかた、されたくない。まだ言われてないけど、言われたくない。

遠回しにだって。

「いい話だから。わたし、この学校行ってもいい？」

だから、わたし、満面の笑みで言ってやった。

けど。

「……そうか、ならわかった」

お父さんの反応は想像していたのとは、ぜんぜん違っていて。

「里美、これを見なさい」

そう言って、テレビのスイッチを入れた。

朝の情報番組は、ふだんのゆるい空気ではなくて、コンクリートの瓦礫の山を映していた。今年はそんな映像もずいぶん見てる。でも、それは見覚えのある建物のような気がして、そして、ふと見た食卓の上の写真、聖木乃女子学院のパンフレットの表紙とダブっていて。ていうか、同じ場所にしか見えなくて。画面の右上隅には、爆破テロ、女子校、の文字。

なにこれ。

「なにこれ？」
思ったままが口に出て。
「……」
お母さんはなにも言わずハンカチで目元を拭った。泣いてる？
「昨日の事件だ。里美は倒れていたから知らなかっただろうが、聖木乃女子学院と、木乃の駅に何者かがテロを仕掛けたらしい。学校はこの有様で、駅に至っては跡形もない」
お父さんはテレビを消し、わたしの目をまっすぐ見た。
「これを見ても、まだ行きたいか？」
「えっ……え？」
どういう意味？
学校にテロ？　駅が跡形もない？　わたしが行くのはテロのあった街の、テロの標的になった学校ってこと？　それって学校存続できるの？　いや、そんなこと問題じゃなくて、お父さん？　ひとり娘をそんな学校に行かせる気なの？　正気？
バカ？　ぱかじゃなくて、バカなの？
ありえない。いくらお父さんが体操バカでもそんなことは。
「もちろん――」
行かない。行くわけがない。そんな危ないとこ。
「そうか、わかった」
お父さんは、わたしの言葉を最後まで聞かなかった。
うちではよくあることで。同じ競技をやってたからなのか、スポーツ選手特有のものなのかはわからないけど、お父さんとお母さんは以心伝心で。その娘であるわたしも勝手に以心伝心の中に組み込まれてて、よく、言ってもいないことを合点承知されてる。
困るのだけど。
「お父さんは、ずっと言おうか言うまいか迷っていた」
わたしが口をぱくぱくさせている内に、どんどん話が進む。
「里美、おまえには体操の才能がない」
「……んな」

わかってる、けど、このタイミングで言わなくても。
「技術もセンスも、並のレベルを上回るものはないだろう。やめたいというのならば、お父さんも無理強いするつもりはなかった。しかし、やるというのならば、より自分を高みに運ぶことのできる環境へ向かうべきだ。お父さんやお母さんから離れても」
と、思うと言葉もでなくて。
「才能、技術、センス、言うまでもなくどれも必要なものだ。だが、それだけで勝てるものでもない。最後にものを言うのは危険へ飛び込む勇気だ！　プレッシャーの中で自分を見失わない度胸だ！　不可能へ挑むチャレンジング・スピリッツだ！」
最後にものを言うものが三つもあります、お父さん。
「体操は常に死と隣り合わせの競技だ。だからこそ、いつでも死を意識して、その恐怖に立ち向かわなければならない。体操をつづけるという意志があるとわかったからには、己を厳しい環境におくことも大切だ。それが里美、才能を超える武器となるはずだ」
そう言い切って、自分の言葉に納得するようにうなずいて。
「娘をよろしくおねがいします」
お母さんが平島さんに頭を下げた。
「ええ、必ず里美さんを立派な選手に育て上げてみせます」
「……」
どういうこと？
それは、たしかに言ったけど？　わたし、この学校に行きたいって。うん、言った。でも、ふつう、テロの現場に娘を送り出さないって、まともな親なら。まともな……そっか、あんまり意識してなかったけど、まともな親じゃなかったんだ。じゃ、仕方ない。
今、わかったよ。
「あの、よろしくおねがいします」
わたしも、両親に合わせて頭を下げる。
テロで死んでも、体操で死んでも、どっちでも死ぬのは同じ。

なんて、簡単に割り切れるわけもなくて。
また、神社に来ていた。
朝ごはんを一緒に食べながら、テロのこと「二度目ということがないように最高の警備体制を敷くので、日本で一番安全な学校になります」とか、平島さん言ってた、けど。もちろん、それで不安が安心に変わるなんてこと、あるわけなくて。でも、本質はそこじゃなくて。
いいのかな。
わたしの人生、こんな風に流されてて。
よくないな。
賽銭箱によりかかって、神様の扉を蹴っ飛ばして、いつもと変わらずかかってる錠前をがたがた言わせて、汗でしんなりした前髪がそよ風でひんやりして、おなかが空きはじめて、もうお昼ぐらいになってて、わたし、どうしようもない感じ。
お父さんのことも、お母さんのことも、嫌いってわけじゃなくて。体操もなんだかんだ言って、積み重ねてきて、捨てるのがもったいなくて。
だから、新しい環境に行ってみたい気持ちもあるけど。
わたしがほんとうはどうしたいのか、わからない。自分でも。
「もっと、なんか、ないかな……」
「あるよ、里美さん」
呟きに被せるように、後ろから言われて、見上げて。
「あなたには資質がある」
平島さんが賽銭箱の上に乗っかって、わたしを見下ろしていた。
どういう理由かわからないけど、巫女さんの服を着て。
「そこ、乗っていいんですか？」
「ああ、これ？　別にいいんだよ、ここに神様いないから。お賽銭を投げる人もいないし」
いない？　お賽銭を投げる人も？
「ていうか帰ったんじゃ」

「帰ってるよ、ここが私の帰る場所だもの」
「体操部のコーチが？」
「あれはウソ。ごめんね。学生時代に体操をやってたのは本当だけど、今は、ここを守るのが仕事だから。そして資質のある人を見つけたら、学校に入ってもらうのも。今回は状況が状況なのでやや強引で性急なアプローチを仕掛けたってわけ」
「うそ？　ここを守る？　資質？　状況？」
よくわからない。
「昨日のことで一番の難関はご家族の了承だったからね？　もっと時間がかかることも覚悟してたけど、話が早めに片付いて助かったわ。これからが本番だもの」
平島さんは、ぴょんとジャンプして、扉の前に立つと、鍵も使わず錠を外した。
昨日の夢みたいに。
「それ……」
「里美さんが倒れたのは熱中症じゃない」
平島さんはゆっくりと扉を開いて。
「急に魔力を浴びすぎたから、身体がついていけなかった」
「……ま、りょく？」
わたしが呟いて、平島さんがうなずいて。
「魔力、魔界から溢れるエネルギー。それを操る魔法でこの世界を守る守護者。あなたにはそうなれる資質がある。だからこの場所に入れたし、鍵を開けることもできた」
「しゅごしゃ？」
神社を取り囲む木々が、ざざ、と揺れて。
「ようこそ、里美さん。競技でも偽装されたテロでもない、本当の世界へ」
わたしに手を差し出しながら、平島さんはどこか哀しそうに笑って。
「ほんとうの、世界……」

たぶん、逃げようと思えばそうできたけど。
そうしなかった。
「……ほんとうに？」
くすっと笑って、私はその手を取って、誘われた。
昨日感じた、ワクワクした気持ち、まだここにあったから。

## #2　わたしとしても、やめるつもりだったけど？（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

## ♭1　昴　星河

地球を含む広大な宇宙がひとつの世界であるように、『魔界』もまた数多の世界のひとつでしかなかった。それぞれの世界は、それぞれ無関係に存在し、それぞれの時を歩んでいる。世界と世界の狭間は『境界域』と呼ばれるなにもない領域によって時間と空間を隔てられ、本来は交わることもない。

その本来的には交わるはずのない世界の境界を乗り越えてしまう力こそが、魔界の魔界たる由縁とも言える『魔力』であった。そのエネルギーは欲望する。空間的、時間的制約を無視して魂を求め《転位》し、魂の意志を侵蝕し《変異》する。植物を著しく成長させ、動物を魔獣へとその姿を変え、そして世界を魔界に創りかえる。それは人間も例外ではない。だからこそ秩序に対する大きな危険であった。

そんな魔界、魔力からこの世界を守る存在が『守護者』である。地上に魔力を放出する『魔界の穴』から人を遠ざけ、魔力による影響を最小限に抑えることが彼らの目的である。歴史的、社会的経緯により様々なルーツを持つ彼らだが『魔界の生活技法』通称『魔法』を用いるという点に関しては共通している。魔力を知ればこそ、魔力を用いることでしか対抗できないことは明らかだった。結果、彼らは『魔法』を世に隠しながら、『魔法』を使って世を守る、という二律背反を背負っている。そしてそれは除去困難な『魔界の穴』という原因と共に、解消されることなく一族の秘密として受け継がれることになった。

昴星河（すばるせいが）もそんな守護者の家に生まれたひとりである。

兄一人、姉二人、妹二人、三女の星河が『資質』に目覚めたのは十一歳の冬。

その年はじめて積もった雪で遊んでいる内に、気がつけば昴家の管理する魔界の穴がある古墳へ導かれていた。古墳と言っても本物の墓所ではなく、その時代より受け継がれたカモフラージュである。鬱蒼と生い茂る木々に隠され、魔力を体内に十分吸収していなければ認識することすらできない場所へ誘引されること。それこそが資質の第一条件である。

星河の握りしめた雪玉が氷の塊になっていた。

「なんやの……ここ」

彼女の目の前にはどこか巨人が思いつくままに積み上げたかのような無造作さで、しかし決して崩れないバランスの岩石がモニュメントを作り出していた。アンバランスな構造物は、まるで崩してほしいと言っているようにも見える。

「えらいもんや」

そう呟きながら、星河は内側から湧き出る衝動のまま、雪玉だったものを巨石群に向かって投げつける。フォームもなにもない力任せの投擲だったが、氷塊は積もったばかりの雪を吹き飛ばして、巨石の一つに突き刺さった。およそ人間の膂力ではない。

「すっごいわぁ」

投げた星河本人にとってもそれは信じられない光景だった。近付いてみると、突き刺さった岩石に亀裂まで走っている。壊せる。そう思った途端、無闇に楽しくなり、彼女は回りにある雪をどんどん固めて、次々に投げつけた。

巨石に氷塊が突き刺さるたび、キンと甲高い音が森に響く。

「――そのくらいにしとき、星河」

「え？」

ひとつの岩石が砕け、古墳が全体のバランスを崩して倒壊するまで暴れた後、彼女は背後から呼びとめられた。ハッと、自分がしでかしたことの大きさに血の気が引く。

「……お、お母ちゃん？　これはな、違うんよ、うち、な……」

声の主はすぐにわかって振り返るが、そこにいたのは奇妙な格好

をした母だった。
「ぷっ、ははっ、なんやの、その……ふぐっ」
叱られるという思いより笑いが勝った。子供六人を生んですっかりおばさん丸出しの体型となった母がバレエかフィギュアスケートの選手が着ているような、ラインを見せるピッタリとした衣装を身にまとい、切り株に座って脚を組んでいる。
「それ……くふっ、あかん、笑える、ぶ、ぶふっ。豚のプリマドンナ？」
星河は思ったままを口にした。
「だれがプリマハムや！」
母はそう叫びながら、中指を親指に引っ掛けて弾いた。
「へ？　……っぎゃはん」
十数メートルは離れていたが、星河はバットでぶん殴られるかのようなゴツンという衝撃と共に、仰向けにひっくり返る。パワーは段違いだが、それは確かにお馴染みとなっている母のデコピンだった。当たった場所に触れると血まで出ている。
星河は青ざめ、飛び起きて抗議した。
「ちょ……お母ちゃん、嫁入り前の可愛い娘の顔になんてことしてんの！」
「そこ？　あんた、ちょっと鈍いんちゃう？」
母は呆れた顔で耳の穴に小指を突っ込んでほじった。
「にぶい？　あんなぁ？　こんなん傷跡残ったら、うち……って、あれ？　治って？」
星河は言いながら手鏡で自分の顔を見ていたが、血を拭うともうそこには傷口もなかった。赤くなった形跡すら残っておらず、何事もなかったかのようである。
「まあ、ええわ。ちょっと見とき」
母はそう言って、スタスタと崩れた古墳に向かって歩いていく。
「……？」
「よっこいせ！」

掛け声とともに、母は崩れた古墳の巨石を持ち上げた。
ひとつひとつが大型の重機でもなければ動かないような代物だけに、それだけでも信じられない怪力だったが、星河が砕いた方の岩石の欠片が勝手に動き出し、元々置かれていた位置へ戻り、みるみるうちに元通りの形へ修復されていく。
「は、へぇ」
星河はぽかんと口を開けてそれを見守るだけだった。
「どうや？」
「お母ちゃん、ハムやのうて、スーパーマンやったんや……」
古墳と母を交互に見て、呟く。
「そこはせめてスーパーガールとか、プリキュアとかゆうたらどうや？」
「……そやな、キュアフラワーや」
妹と一緒に見ているアニメについて星河は重々しく言った。
「それババアやろ。知ってるわ」
デコピン。
「ぎゃはん！」
今度はひっくり返らず、踏ん張った。
「キュアムーンライトぐらいお世辞でも言えへんの！」
「高校生やで、お母ちゃんそれは犯罪や」
「セーラーマーキュリーバカにしとんか！」
「しらんわ！」
母娘の口喧嘩はなかなか収拾しなかった。
一通り落ち着いて母が説明を終える頃には日も暮れていた。
「――まあ、つまりや、あんたは魔力を身体に吸収して使える、守護者になりうる資質があると。それが今日、ハッキリしたっちゅう話やな。あんたの雪玉で石を砕けたり、お母ちゃんのデコピンが飛んだり、傷がすぐに治ったり、重たいもんも持ち上げられたり、それもこれも魔力によって肉体が強いものに《変異》してるからということになる」

「お母ちゃんが世界を守ってたとか、信じられへん」
しんしんと積もる雪の寒さも気にならないほど、星河は考え込んでいる。
「あくまで昴の家がこの場所をずーっと昔から守ってきたというだけのことや、お婆ちゃんも、ひぃ婆ちゃんも、その前も。そんで、星河はどうする？」
「……どうするて、うちがその守護者になるかどうかってこと？」
「そうや」
母はこっくりとうなずいた。
「そんなん……いややわ。戦うとか、できる気がせえへんもん」
星河は正直に打ち明けた。
話を完全に飲み込めたという訳ではないが、それでも自分がよくわからない魔界とやらからこの世界を守るために命をかけるなど想像もできなかったし、命をかけられるとも思えない。母が命をかけていることすら信じられなかった。
「まともな答えやね」
母は納得する。
「星河の気持ちがそうやったらそれでもええ。けどな、これだけは言うておく。残念ながら、資質があるとわかった時点で、どの道へ進もうとも決して自由にはなれへん。あんたには生涯監視がつくし、様々な制限が待っとる。もしならんと決めたら、あんたはおそらく昴の家から遠ざけられる。ここはどうしても魔力の影響が強い場所やからな、その後も、たとえば住む場所も自由には決められへんかったり、職業選択も限られる。結婚もダメな場合がある。海外へも出られへん、国内の移動も事前に許可をとらなあかん。挙げていったらきりがない。まあ、言うてもピンとこんやろうけど」
「……お兄とか、お姉たちはどうやったん？」
母の言葉に心細くなりながら、星河は尋ねる。
「お兄は資質があったけど守護者にはならん。男が守護者になるのは色々大変やねん。それに守護者の世界が昔っから圧倒的に女主導

っちゅうのもある。けど、大学出て官僚になった。簡単に言えば守護者のバックアップをするために政治の中枢を目指すっちゅうことやな、あっちは言うても男主導の社会やから、これは適材適所や」
「お兄も資質あったんや」
「あの子は十七のときやった。根が真面目な子やったから大分悩んだみたいやけどな。そんで宇宙(そら)は資質が出てない。穴の近くにずっと暮らしてて出てないんやから、おそらくないんやろう。だからなにも知らんと普通に大学生やっとる。この場合は知らない方が幸せやろう。一族やから監視がないわけやないけど、実質的には普通の子とそんなに変わらん。こういう場合は一生出ないことを祈るしかない」
上の姉について語るとき、母は表情を曇らせる。
星河は唇をきゅっと結ぶ。資質がないことで自由ではあるけれども、家族からはすこし外れてしまう。それはなんとなく心苦しいことだった。
「銀河(ぎんが)は十二で資質が出て、守護者になるために学校に行っとる。跡を継ぐ、と言ってくれとるな。歌手になりたいゆうてて、お兄と色々話し合った末のことやから、すんなりという訳でもない。あの時点ではあの子以外に後継者候補もおらんかったから、お母ちゃんもかなり無理をゆうた。今はわかってくれてるとは思うてるけどな」
下の姉について語るとき、母は申し訳なさそうに言う。
「うちが選べるんは、銀河姉のおかげなんか」
俯いて、星河は言う。
「そういうことや。けどな、そのことで星河が遠慮する必要はない。色々あったんは確かやけど、それはそれや、最後に選ぶんは本人やからな」
「そやろうけど――」
星河は顔を上げて、母の目を見る。
「――ひとつ聞いてもええ？」
「ひとつと言わず何個でも聞いたらええ」

「ひとつでええんよ。お母ちゃん、守護者やってて死ぬと思ったことある？」
「ある」
娘の言葉に、母は即答した。
「それこそ何度もある。もう十年ぐらい前になるけど、後輩が死んだのも見た。自分がいつ死ぬかもわからん。まあ、給料は悪くないし、色々特典もある。けど、割に合うかどうかは保証できんわ。やるかやらんかは気持ちや。あんたに守りたいものがあるかどうか」
「守りたいもの……か」
母の言葉に、娘はうなずく。
星河自身、意外なほど、その感情はしっくりと馴染んでいた。
「あるよ。うち、守りたいもの。お母ちゃん。うち、お母ちゃんも、お父も、お兄も、お姉たちも、みんな。そやから、助けになるなら……」
家族を見捨てる気にはならなかった。
「そんなにすぐ決めんでもええんよ？　考える時間ぐらいは取れる」
そう言いながら、母は嬉しそうに笑った。
「うち、なるよ。守護者に」
星河も笑う。
そうして彼女の守護者への道がはじまった

## ♭1　昴　星河（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

## ♭2　イワしたる

星河の訓練は放課後、母の直接指導によって行なわれた。
生来、真面目な彼女は、友人らとの約束を断ち、学校が終わるとまっすぐ古墳に向かった。吸収した分の魔力を活動で消費するバランスを身体に叩き込むこと、それが第一歩である。
そして同時に守護者として必要な戦いの基礎を習う。魔法とは言うものの、魔力は肉体から離しては使うことができない。魔力が攻防においてその力を発揮できるのは、使用者の意志と接する範囲であり、それ以外では大気中に霧散してしまう。
ともあれ、母が投げる岩石をひたすら砕く。それが星河に与えられた課題だった。もちろん心得などない彼女は、ソフトボール大に砕かれた古墳の一部を投げつけられる度に傷だらけになったが、次第にコツを掴み、半年も経つと自分と同じぐらいの大きさの岩ならば、十数個一度に飛んでこようとも両腕両脚をフルに使って粉々にできるまでに成長した。
「――でも、守護者って不便やわ」
夕方からのトレーニングを終え、ストレッチをしながら星河は呟く。季節はすっかり夏になり、寒くはないが、Tシャツとハーフパンツは汗でびっしょりである。
「なにがや？」
普段着にエプロンをつけたどこにでもいる主婦然とした母は、粉々になった岩石は自動的に集まって大岩に戻るのを待ち、古墳を元通りにしながら答えた。
異様だが既に日常の光景である。
「ゆうたら、地上で魔力がようさんある場所やないと戦えへんのやろ？　ここかて、ふつうの人には見つからへんようになってる結界の中だけってことやん。敵さんが来たかて、戦うには中に来るまで待ってなあかんってことになる。どう考えても不便や」

「あんたがそんな心配するんは十年早いわ」
古墳のバランスを整え、背中を向けたまま母は娘の心配を鼻で笑った。
「敵がなにかもわからん癖に。ちょっと余裕でたらこれや。生意気っちゅう……」
「お母ちゃん！　うち、マジメにゆうてんやから――」
星河は抗議する。
「方法はある！」
娘の言葉を大声で遮って、母はくるりと振り返った。
「そないなこと、だれでも考える。あんたがゆわんでもな！」
キッパリと言って、深く息を吐いた。
「――……どうやって？」
星河は首を傾げる。
「鍵や」
「かぎ？　キーの鍵？」
「キーの鍵やもちろん。そろそろ頃合やろうとは思って上に頼んでた」
そう言いながら、母はエプロンのポケットからキラキラと輝く半透明の物体を取り出す。鍵と言われればレトロな鍵の形をしてはいるものが二本、一本は黄色に輝き、もう一本はほぼ透明に近く、辛うじて月明かりに照らされてその形を確認できる。
「受け取り」
そう言って、透明な方を投げる。
訓練で慣れた動きなので、星河は動ずることなくキャッチした。
まるで重量を感じない透明の結晶は冷たくもなければ温かくもない。それどころか感触さえ定かでなかった。石や金属の類ではない不思議なものであるということがすぐにわかる。
「……なんなんこれ」
「守護者の鍵。これまでの訓練は、それを使うための準備に過ぎん」
母は娘に向かって黄色い自らの鍵を掲げる。

「見とき」
呟いて、その先端を自分の胸に一気に押し込む。
「え？　なんや？」
驚いた星河だったが、それはすぐに別種の驚きにとって変わられる。
母が胸元に当てた手をゆっくりどかすと、そこには黄色の輝きがある。そこから首、顔、そして腕、脚へと光が走り、年齢相応にゆるんだ身体は見る間に引き締まっていく。ほんの数秒後には子供を産む前、写真でしか見たことのない麗しかったころの母がいた。
「お母ちゃん、それ……どないなってんの？　痛くないん？」
なんと言っても鍵が胸に刺さっている。
「……爪弾くは荒ぶる調べ――」
厳かに母は口を開いた。
「アホか！　プリキュアはどうでもええわ！　どんだけ根に持ってんの？」
まるでわかっていたかのように娘は速攻でツッコミを入れた。
「――あかん、そないやいやい、やる気なくなるわ」
「お母ちゃん！」
「知らん、お母ちゃんなんも知らん。この姿を見て、まず真っ先、褒めてもくれへん娘なんか知らんよ。あああ、可哀想やわ、六人も子供産んでお母ちゃん可哀想！」
ぐにゃりと全身の力を抜き、母はぺったりと地面に伏せた。
「可哀想て……」
呆れながらも、脚を百八十度開脚し、ぴったりと折り畳まれた柔軟な姿に星河は驚く。
「……お母ちゃん、美人や、うん、たぶん日本一やな」
「ほんまに？」
「ほんまほんま、三十代部門なら世界一でもええよ」
子供か、とツッコミたいのを堪えて、娘はにこやかに答える。
「そうか、お母ちゃん世界一か！」

「よ、お母ちゃん世界一！」
胸を張って立ち上がる母を、星河は拍手で囃したてる。
「そうやろ、このツンと上を向いたる乳も、キュウッとくびれた腰も、バンとした尻も、あんたら産んでくたくたになる前は世界一やったんや！　そらもうモテてモテて大変やったんやで？　聞きたい？　お母ちゃんの花盛りの君たちへ？　聞きたいやろ？」
「え？　あぁ、聞きたいわぁ、うち、ほんま……」
早くもウンザリしはじめた娘を他所に母の長話がはじまった。
一頻り語り終えるころには、あまりの長尺に星河など空腹のあまり抱腹絶倒である。
「――っちゅうことで、あんたのその小学生にしては立派な乳もお母ちゃんの遺伝や、感謝しいや……あれ？　なんの話してたんやっけ？　星河？」
「ええよ、お母ちゃん。今、お父をどうやって落としたかって話や」
「あ、ああ……ま、それはええな。で、守護者の鍵やけど」
「やっと戻った」
娘は小声で呟いた。
「なにブツブツゆうてんの？　ここから大事やからな、ちゃんと聞き」
「……はい」
抵抗する気力もない。
「この鍵には二つの重要な効果がある。ひとつは魔界の穴を切り取って守護者自体に直接魔力を供給するちゅう、あんたが最初に言った、戦う場所を限定する条件の解除やな。ベースになる穴が塞がったりせん限りは、どこでも使えるし、その供給量も限りない」
人差し指を立て、母はそう言って親指も立てる。
「ふたつは経験の蓄積や。すべての鍵は、これまでに守護者が行なった戦いの記録が刻まれ共有されとる。情報量が膨大やし、使用者の実力に応じてしか引き出せへんものもあるけどな。それでも、鍵を使いさえすれば、専門的な格闘技を習う必要はほぼのうなる。基

礎としてあれば身体がスムーズに動くけどな、それはおいおいでええ」
「その、胸に刺して痛ないん？」
星河はずっと気になっていたことを再度尋ねた。
「これか？　痛ないよ。この鍵は境界で出来てる、ここにあって、ここにない。つまり、これが肉体に影響を与えることはない。お母ちゃんもこれは説明しててよおわからんけどな」
母は高らかに笑った。
「さよか……」
娘は脱力感に肩を落とす。
「まずは自分で使って確かめることや、おいで」
母はそんな星河の腕をひっぱり、古墳の目の前へ連れていく。
すっかり夜も更け、濃い影を落とす巨石群が少女を見下ろす。それは魔力を適度に吸収し、風化に耐えることで、地上に放出される魔力の量を抑えてきた、魔界の穴を塞ぐ重石のようなものだった。いくら砕いても元通りになる、魂を持った石。
「どれでもええ、鍵を当ててみ」
「うん」
星河は手近な岩肌に確かめるようにゆっくりと透明な鍵を挿す。豆腐に箸を立てるように、それは音もなくするりと飲み込まれ、じわりと光を抱いて輝き出す。
「あんたも黄色やな」
「色に意味あんの？」
「ない、性格が出るっちゅう噂もあるけど、血縁では大体一緒やからな」
「そうなんや」
光のぶん少し温かみを感じる鍵を引き抜くと、星河はそのまま自分の胸に押し込んだ。まるでそうしろと言われてるようでもあったが、同時に自分の意志であることも確かだった。
これまでより強く魔力が身体を《変異》させようとしていること

を感じる。
「どうや？」
「なんか、気持ちええ……」
答えながら、しかしどこか上の空で星河はつぶやく。
「そやろうな、守護者の鍵は、理性が閉ざしている欲望のタガという鍵を外す、そんではじめて魂の深いところまで当人の望むものを《変異》として引き出せるわけやから――」
母は娘の様子を見て話をつづけるのを止めた。
「……気持ちええ」
焦点の合わない目をとろんとさせて、しかし星河は内側から溢れてくるエネルギーのやり場を探していた。暴力的なまでの衝動、その対象を。半開きになった口で荒く息を吐き、そしてすぐ側の『的』を見つけるのに時間はかからない。
「――よし、正気に戻るまで一丁やろか」
「……あ」
理性が答えを出すより早く、星河の拳が暴発した。
「ちょっと痛いけど覚悟しい」
母は娘の拳を受け止め、何十倍にもして返した。

それから数日後、昴家が管理する古墳を含め、全国の魔界の穴に対する大規模な襲撃が起こった。メインターゲットとされた聖木乃女子学院ほど顕著な被害は出なかったが、戦いの中で星河の母、そして候補生であった姉も、被害を受けることになる。
鍵を手に入れたばかりの星河自身は自分も戦うことを希望したが、当然、許されなかった。彼女は未熟だった。ただ、荒れ果てた古墳の惨状と、魔力をもってしてもすぐには癒えない痛手を負った母と姉の姿を強く胸に刻むことになる。首謀者のひとりとされる守護者の裏切り者、聖（ひじり）の名前と共に。
「――星河、あんた、聖の学院に行く気はあるか？」
再びの冬、母との訓練の最中、星河は不意にそう告げられる。

襲撃以降、更に熱心に研鑽を重ねた結果、彼女はめきめきと実力をつけている。それでも母が本気さえ出さなければウォームアップになる程度というところではあるが。
「いや？　行かへんよ？　うちは、お姉と同じ学校行くし、なんで？」
突きのフェイントを読み、ハイキックをかわして、答える。
「結局、夏のことでハッキリしたんは、守護者も平和な時代がつづいてもうて、実戦から遠ざかってたっちゅうことやった。お母ちゃんにしても本気を出すんは十年ぶり、四度目、数えるほどや。鈍ってた」
かわす娘を楽させない連打で追い込みながら、母は言う。
「そう感じた人間はどうやらようさんおるらしい」
「？」
なにを言われているか計りかね、星河の動きが鈍る。
「そこっ！」
すかさず、母の身体が懐に潜り込み、肘が娘の下っ腹を打ち抜く。軽く浮いたところを流れるように顔面をつかまれ地面へ叩きつけ、首を押さえ込まれた。
「……げは」
「にわかに聖の学院がある、あの街が最前線になってきとる。これから守護者になろうゆう連中の中でも、特に上を目指すもんは、実戦により近い場所を求めて集まりつつあるっちゅう話や。そん中には、聖の娘もおるらしい」
「！」
倒れたまま聞かされた話に、星河は目を見開いた。
「まあ、正直に言えば、この話はお母ちゃんらの都合もある。特に古くから魔界の穴を専属で守っとる一族にとって、その代表格のひとつである聖の裏切りはインパクトがでかかった。実際、国内では危険度があがっとるあの街にだれも送り込まんようでは体面がない。無理強いはしたくないんやけど、銀河はまだ回復に時間がかかるし、

都合がいいのはあんたしかおらん」
申し訳なさそうに言うと、母はゆっくり立ち上がった。
「お、お母ちゃん」
喉を押さえながら、星河は声を振り絞る。
「うちが……聖の娘をイワしたったらええんや、ろ？」
かすれた声でそう口にして、にやりと笑う。
「……そこまではゆうてへん」
「同じことや」
鼻の頭を掻いている母を見上げて、星河は呟いた。

## ♭2　イワしたる（後書き）

お読みいただきありがとうございました。
作中に登場した襲撃事件については前作「正義の街」（ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ１２５２ｔ／）をお読みいただければ詳細がわかります。登場人物についても引継ぎがあります。ただ、これは単にストーリーの起点であって、読まなくとも本作を読むのに支障ないように書いていきますので、あらかじめご了承ください。

## #3　そういう世界は違わなくて。

だいたい、体操でトレーニングには慣れてて。

平日の朝夕、休日のほとんど、そんなスケジュールも変わらない日常で、退屈して。たしかに魔力を取り込んで身体が《変異》とかして、バック宙が一回転は余分に飛べるとか、ムチャして筋を痛めてもすぐ治るとか、実感はあったけど、神社を出たらその効果も切れて、競技会で披露できるわけでもなくて、結果に結びつかないから、あんまり、ううん。

ぜんぜん、楽しくなくて。

「学院に行けば同じ条件で競い合う仲間ができるから、辛抱して」

平島さんはそんなことも言ったけど、あんまり期待、してなかった。

それで春休みは「お別れだから」とか言って、友だちと遊び倒して、入学式前日ギリギリまでねばって、寮に向かうことにした。無理すれば通えないこともない距離で、お父さんもお母さんも無理して欲しそうだったから、逆に、ちょっと反抗してみて。

出発するとき、ふたりとも泣いてて。

「泣かないでよ、いつでも帰れる場所なんだから」

言いながら、ほんとうに家を出るんだって思ったら、気分がはずんだ。まるで床を蹴った瞬間に着地の成功まで見える瞬間みたいな、冴えたイメージ。

「行ってくるね」

真新しい制服の匂いに包まれて、期待してなかったはずなのに、キャリーバックを引っ張る脚も軽い。わたしは、中学生になる。新しい世界へ、やっと。

ステップを上がれる。

なんども通過していたのに印象のなかった木乃の駅は仮設だった。改札を抜けると、駅前は工事現場のまっしろな囲いと青空とぴかぴ

かの建物が描かれた看板で、今年度中にはおおきなショッピングモールが建つらしい。イメージアップが、なんだか現実的すぎる。
魔法で消し飛んだなんて、だれに言っても信じてもらえそうにない。
平島さんには「だれにも喋っちゃダメだから」としつこいぐらい言われて、喋ったらわたしだけじゃなくて、その話を聞かされた人もふつうの生活には戻れない、なんて、おどかされたけど。秘密の話があんまりウソっぽいから、喋ろうって気になれなくて。
そこはワクワクする気持ちを裏切られてた。
でも、学校からすぐに遊べる場所ができるなら『ふつう』にいい。
考え方。ふつうじゃないことを楽しむのも、ふつうのことを楽しむのも、両方あり。そう思ったら、学校が二倍楽しめるような気がして。だから、わたし。
向かう先がライバルだらけだってこと、忘れてた。
「――聖木乃女子学院寮前」
専用のバス停、中等部から大学部まで希望者すべて入っているという寮は、ヨーロッパ風の建物が何棟も並んで、その間にはレンガ敷きの道、オシャレな街路灯と、青々とした街路樹、パンフレットで見てはいたけど、そこだけ別の街みたいになってて。
「あー……」
ちょっと、引いた。
体操の世界でもそうだけど、すごい人は、すごい大事にされる。
そういう世界は違わなくて。
ここにもある。
現実的に。
だから、カラフルな洗濯物がなびく女子寮街の奥の棟「かえで」に着いたときには、楽しい気持ちはぺしゃんこに潰れてた。身体の動きが決まらないときの、重たいイメージ。
自動ドアの玄関ロビーへ、のろのろと。
「ようこそーっ！　かえで寮へ！」

パンっ！　と明るい声といっしょに、紙テープが視界にひろがって。
「はい？」
「こんにちは、今日、入寮の府本里美ちゃんでしょ？」
たったひとりでわたしにクラッカーを向けている女の子がいた。たぶん年上。かなり大柄。同じ制服を着ていて、趣味の悪いピンクのエプロンを着けて、蛍光グリーンの髪の毛が上へ立っていて、それらにも負けないパンクなメイクをしてて。
生活感があるやら、ないやら、
「……はい、府本です」
理解できなくて、ほかになにも言えない。
「ようこそようこそーっ！　ここの寮長をしてます。中等部三年、戸田圭子です。捕捉すると、生徒会の副会長でもありまーす。困ったことがあったらなんでも訊いてね？」
「……」
名前ふつう！　生徒会副会長？　気さく！
リアクションに困ることがたくさん。
「ささ、まずは部屋へ行きましょう。二人部屋なのは聞いてるよね？」
「あ、はい」
「荷物の到着順で部屋割り決めてるから、里美ちゃんは３０８号、これカードキー」
言いながら戸田さんはカードをわたしに手渡すと同時にキャリーバックをひったくって歩きだす。ついて行くしかない。
「一応、セキュリティでオートロック。守護者候補生ならドアぶっ壊せるし、ふつうの暴漢なんか相手にもならないけど、基本的には寮内は鍵の使用禁止だから。あ、『守護者の鍵』ね、カードキーじゃなくて、府本さんは『外の人（そとのひと）』だからまだもらってないと思うけど、入学式のあとすぐもらえるから」
「外の人？」

「ああ、そうだね。ここ、生まれで守護者関係の人とそれ以外の人は区別されるから。ちなみに私も外の人。逆に『内の人（なかのひと）』もいるんだけど、内の人の内側でも区別があって『家持ち』とそうじゃない人が……それはどうでもいいね」
戸田さんはどんどん喋って勝手にうなずいて。
どうでもいいのかな？
「朝食と夕食は一階の食道、こっちの奥」
エレベーターのボタンを押しながら戸田さんはどんどん説明する。
「朝食は午前六時から七時半、夕食は午後六時から八時、お昼はここのキッチンでお弁当も作れるし、買って食べてもいい。手引きの通り。里美ちゃんは食品にアレルギーとかある？」
「え？　いいえ、別にないです」
「そう？　あったら言っておけば別メニューにしてもらえるから、遠慮しないでいいよ？　あとは、寮の門限も八時、遅れると罰があるので注意して。休日遊びに行く時は外出許可が必要で……みたいな細かいことは入寮の手引きに書いてある通りね」
「は、はい」
すぐにエレベーターはやってきた。
「お風呂は食道の反対側、各部屋にシャワーはついてるけど、大浴場は広くて気持ちいいよ。サウナもあるし、利用する人は多いね。水着は禁止、なんでかはわからないけど。伝統？　あと掃除はこまめにとか、ゴミの収集日とか、そのあたりは」
「手引きですか」
わたしは、先回り。
「そうだね、うん」
戸田さんは笑顔でうなずく、蛍光グリーン髪が揺れる。
三階へ移動して、エレベーターホールから左手、一番奥が３０８号室。
表札には『昴　星河・府本　里美』の文字。
すばる、ほしかわ？

「じゃ、同室の星河(せいが)ちゃんと仲良くね？」
「あ、ありがとうございました」
せいが、って読むんだ。
情報量にくらくらしながら、ともかく頭を下げる。
「いえいえー、学年違っても、条件は一緒だから、お互い頑張ろうねー」
戸田さんはさわやかに手を振って来た通路を戻っていく。
わたしは、深呼吸して。
なんだか、あれよあれよと連れてこられちゃったけど、これからしばらく一緒に暮らす人と顔を合わせる緊張がやってきてた。人見知りはしない方だけど、第一印象はとても大事。好かれなくてもいいけど、嫌われたり、疎まれたりするのはよくない。
学校生活が楽しくなるかどうかのポイントになる。
「すばる、せいが」
名前を、つぶやいてみて。
まるで技にはじめて挑戦するときのような、もやもやしたイメージ。
でも、イメージにとらわれてはいけない。お父さんはよくそう言ってて。まずはやってみる。そしてあとは修正していけばいい。それは体操でも、人と人との関係でも、同じだって。
チャイムを押す。
ぱたぱたと軽い足音で、彼女はすぐに出てきて、迷わずドアを開けた。
「どちらさん？」
ジャージ姿の昴さんは、わたしの頭から足の先まで、遠慮なく見て、首を傾げる。
「同室の、府本里美です」
相手がそうなので、わたしも遠慮しない。さらっとした長い黒髪に、白い肌、すこし垂れ目、ちょっと低い鼻、厚ぼったい唇、丸い顔、バランスは美人。けど、なにより目を惹くのは、大きな胸とく

びれた腰、野暮ったいのに、スタイルの良さが隠せない。
なんだか敗北感。
「うちは昴星河。なんや……ちっこくて可愛い人で良かったわ」
昴さんは恥ずかしそうに笑いながら、言って。
「は……」
悪気はないとわかってても、わたしは、言葉に詰まった。
ちっこくて？　そう、お父さんとお母さんにもらった、体操向きのわたしの身体。おっぱいもおしりも小さくて、でも鍛えたから脚は太いし、肩幅も胸囲もあって、しなやかだけどやっぱり筋肉だから、女の子っぽくなくて、髪形も地味にまとめてて。べつにコンプレックスじゃないし、誇りすらあるけど。
でも、それでも、言われてうれしく、ない。
あっちが明らかに優越感を持ってる場合は、とくに。
「どうしたん？」
たぶん、褒めたと思うし。
「わたしも、なんか……おっぱい大きい美人で良かった、って言えばいい？」
けど、嫌味で返して。
「……はぁ？」
初対面から、ほんの一分。
わたしたちは、もう、ライバルだった。

## #3　そういう世界は違わなくて。（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9305y/

---

候補生たち

2011年12月13日06時14分発行